

# ‘倦怠’は存在の反証である ——尹東柱の‘倦怠’と‘生活’にみる日常的植民性の諸相——

姜 信 和

1. はじめに
2. 帝国の日常的植民性の諸相
  - ‘倦怠’をめぐって
  - 2-1. 日常の圧縮図としての「こんな日」
    - 尹東柱の‘倦怠’とは何か
  - 2-2. 五族協和の‘矛盾’と‘倦怠’
    - “澄みわたった倦怠”と“乾いた学課”
  - 2-3. 連鎖する日常の‘倦怠’
    - 「花園に花が咲く」と「終始」の‘倦怠’
3. 日常的植民性の断片群の描出
  - ‘生活’をめぐって
  - 3-1. “生活の包み”は“倦怠の包み”
    - ‘生活’とは何か
  - 3-2. 日常の断片としての‘生活’
    - “しおれた生活”と“生活の営為”
  - 3-3. ‘生活’を観察する余計者の‘倦怠’
    - 「乞食」と「ツルゲーネフの丘」
4. おわりに

キーワード：尹東柱、‘倦怠’と‘生活’、日常的植民性、過剰コンテクスト化、‘民族的抵抗詩人’言説

## 【凡例】

詩作品、論文、資料には「」、詩選集、単行本、雑誌には『』、強調および間接引用には“ ”、直接引用には“ ”を用いる。長い引用は1行2マス空けてからまとめ書きし、引用元を明記する。

## 1. はじめに

韓国の国民的詩人である尹東柱（満州・間島生まれ、1917－1945）は、韓国内のみならず日本を巻き込むトランスナショナルな空間にお

いて、‘民族的抵抗詩人’という政治的偶像に祀り上げられがちである。

なるほど、植民地期の犠牲者として夭逝した詩人の評伝的な側面に惹かれることは、読者として自然なことであろう。しかしながら、テキストに即してみた場合、テキスト外的な情報に過度に依存、あるいは回収された解釈という疑義が拭いがたい。

そこで、それらの解釈とそれに連なる受容傾向、および20世紀初頭の同時代的心象など、社会的相関性に十分に留意した上で、テキストの内在的解釈に基づいた文学的再評価を試みたい。

植民地支配下にあった1930年代以降の朝鮮のモダニズム詩は抑圧的な政治体制の結果として、作者を内向きにし、なかでも優れた詩人たちを内面の凝視に至らしめたのだが、そうした作品の抒情は社会と無関係とは言いがたい。自己に閉じこもっているようにみえる文学作品の抒情も、あくまで社会相関的な内面の表象である。尹東柱の詩語‘倦怠’についても、その諸相が、もっぱら自己に埋没した抒情などではなく、強いられた社会的条件に対する存在の反証であることを明らかにしたい。

尹東柱は、植民地支配に対する抵抗戦線の聖地ともいわれる間島において、名家の長男としての葛藤を抱いていた。民衆神学としてのキリスト教を基調に、男性中心主義的な家父長制の家風のなか、進路をめぐって父と葛藤し、祖父

に嘆息し、疎外感を舐めざるを得なかった（宋 173 - 176）<sup>(1)</sup>。

そうした詩人の詩語‘倦怠’には、家父長制のなかの民族主義的談論と宗主国介入の帝國的モダニティとの狭間で宙吊りにされた、尹東柱のアンビヴァレントな姿が垣間みられる。そして、その姿は決して例外的なものではなく、むしろ植民地期‘インテリ’の類型ともいえるものである。また‘倦怠’は、‘生活’というキーワードと表裏一体の関係にあり、この‘生活’にもまた植民地化の圧縮された日常が垣間みられる。描出されるたわいもなくありふれた日々は、それが平凡であればあるほど、峻烈な日常的植民性（everyday coloniality）の諸相をあぶり出す可能性を秘めている。

以上のように、‘倦怠’と‘生活’に焦点をあてて詩を読み解くことによって、尹東柱を‘民族的抵抗詩人’と称揚する過剰コンテクスト化（over-contextualization）の文脈とは異なった視点から、彼の詩の新たな可能性を探る。それは、東アジアにおいて国境と民族を跨ぎ越して相互補完的に称揚される尹東柱の脱神話化を図ることに他ならない。

## 2. 帝国の日常的植民性の諸相

### — ‘倦怠’をめぐって

中学の校庭での日常を描いた詩「こんな日」は、満州が舞台であるがゆえに、独立運動に回収された解釈がなされがちなのだが、それについての疑問点を、訳詩の検討を通じて明らかにする。さらに、上述の詩と同じく‘倦怠’とい

う詩語が含まれた作品、「花園に花が咲く」と「終始」を分析し、日常的植民性の諸相について考察を試みる。

### 2-1. 日常の圧縮図としての「こんな日」

#### — 尹東柱の‘倦怠’とは何か

尹東柱は、‘国語’の教科書に掲載されるなど、韓国では誰もが知っているばかりか、非常に人気のある詩人のうちのひとりである<sup>(2)</sup>。崔東鎬によれば、その人気には二つの理由がある。まずは“彼が若い歳に監獄で殉死したということであり、つぎに彼の詩が平易に読ませる、やさしい詩である”（崔 309）ためである。この人気の秘密は、ほぼ一直線に‘民族的抵抗詩人’といった称揚につながる。尹東柱の詩は、冤罪で逮捕され無念にも獄死へと至った生涯と切り離しにくく、詩人の生涯から詩の解釈を導き出したいという欲求が抑えがたくなるのである。

しかし、そうした欲求と詩の解釈についても前掲の崔東鎬は適切な指摘を忘れない。“尹東柱の詩も詳細にみていくと、簡単には解けない言いまわしが多く、愛国心や独立運動によって尹東柱の詩を過大評価するのもおかしいことだが、彼の詩を躍起になって平凡化するのも穏当なことではない”（崔 310）。作品の状況的コンテクストを平静に踏まえることと、テクストを内在的に読むことのバランスのよさが求められている。そうした指摘を踏まえて作品世界に入っていきたい。まずは、「こんな日」である。

権五満によれば、尹東柱の初の詩作ノート、『ぼくの習作期の詩でない詩』に収録されている「こんな日」（1936. 6. 10）は、李箱（京城

(1) 父の尹永錫は、北京に東京に遊学して英語を習い、尹東柱も通った小学校で、母方の伯父である金躍淵の運営する明東学校の教員をしたこともあったが、ついでその父の尹夏鉉から経済的に自立したことはなかった（宋 174）。尹夏鉉は行動力にも長け開拓により成功も収めた小地主で、キリスト教会長老も務めた実務能力の高い人物であった。

(2) 日本では、1990年に筑摩書房刊行の高等学校教科書『新編現代文』に、詩人の茨木のり子の著書『ハンブルグへの旅』所収の尹東柱に関するエッセイが採用されてから、広く一般に知られるようになった。さらに1992年には、東大比較文学会において大きくとり上げられて（『比較文学研究』61号）以降、ますます頻繁に話題に上るようになった。

生まれ、1910 - 1936) の「こんな詩」(『カトリック青年』1933. 7) の表題を模倣、借用した例としている(権 179)。しかし、その両者に関しては一般的にまったく異なった評価がなされている。女性がらみの李箱の風評と内縁の妻・琴紅の出奔によって取り残されてしまったときに詠んだ詩だとする逸話に誘引されてか、李箱の「こんな詩」はわかりやすい失恋の詩と軽々に結論づけられる。それに対して、尹東柱の「こんな日」の帝国の前線・満州における日常描写は、“民族主体的な時代認識”(権 136) が強調され、さらにその詩作法については、“参与的な志向とは無関係な李箱の技法を援用することにより、語り手の痛みで描出された参与詩の一形態を考案した”(権 239) と、社会参加的な詩であるとの評価を下している。以上を念頭に置きつつ詩の考察に入るのだが、その前に‘倦怠’という用語について暫定的な定義づけを行い、次節で具体的な分析に入る。まずは、拙訳を提示しておく。

仲のいい正門の二つの石柱の端で  
五色旗と太陽旗が舞う日  
線引きした地域のこどもらが楽しんでいる。

こどもたちに 一日の乾いた学課で  
澄みわたった倦怠が宿り  
「矛盾」の二文字が理解できないほど  
頭が単純だったのだな。

こんな日には  
失ってしまった頑固だった兄を  
呼びたい。

——「こんな日」

さて、以上の詩に出てくる‘倦怠’とは何か。それについて考えるために、同時代の日本人、熊谷孝の議論を参照したい。尹東柱や李箱

たちと同じ頃に帝都東京に暮した熊谷孝(1912 - 1992) は、‘倦怠’というキーワードを芥川や井伏、太宰の文学の特質を語る形式で探求し、彼らは“自己のジェネレーションの問題として、また自己の存在証明の問題として飽くことなく追求しつづけた”(熊谷 191) のだと解釈した。その上で、‘倦怠’とは“倦怠の心情にのめり込んだ文学という意味では”(熊谷 191) なく、否応なく歴史的現実に取り出された人々の“コギト・エルゴ・スム”(熊谷 191) の‘倦怠’であり、かつての現場における“ひずみやゆがみ”(熊谷 133) の表象であると結論づけた。

日本人の熊谷はさらに、‘倦怠’が“インテリ用語”(熊谷 132) として普及するほどになったのは、“やはり大逆事件がシンボル・マークだということになる”(熊谷 132) と考え、その想念自体を否定するのはたやすいが、“自分の人生はもはや決定し尽くされている、それゆえの人生への倦怠感というのは、第一次大戦後のヒューマンイズムの昂揚にもかかわらず、依然たる帝国主義による疎外に対する、それなりの抵抗感覚”(熊谷 132) であると、当時の‘倦怠’に関する解釈の幅を提示した。

その示唆を受けとめて、尹東柱そして彼を含む朝鮮人にとっての‘倦怠’に戻ろう。被植民者の地位に追いやられた朝鮮人たちにとっては、日韓併合こそがシンボル・マークであつたろう。尹東柱に至っては、14歳で目の当たりに、傍観せざるを得なかった満州事変と傀儡帝国の日常のなかで、早熟な‘倦怠’に沈潜していったことも想像のつくところである。詩語‘倦怠’はその言葉が一般に想起させる後退的な含意とは正反対に、すぐれて時代的、社会的な意味を担っていた可能性がある。

## 2-2. 五族協和の‘矛盾’と‘倦怠’

### — “澄みわたった倦怠”と“乾いた学課”

以上の前提のもとに、詩作品「こんな日」の

分析に入ろう。満州帝国のとある祝日である。漢族、日本族（自明、朝鮮族を含む）、満州族、白系ロシア族、蒙古属の協和をうそぶく“五色旗”と、大日本帝国の象徴である“太陽旗”がはためき、“線引きした地域”は、学校の運動場の一角を示しつつも、満州という領土を容易に想起させる。

さて、既存訳にしたがい①“ものうい倦怠”と、②“ひからびた学課”とされている詩句の解釈をめぐる問題を糸口にしよう。既存訳と原文との比較を手がかりに、翻訳受容の危うさを再確認しながら、新たな解釈の可能性を模索してみたい。ただし、改めて言うまでもないだろうが、既存訳の是非を論じようとしているわけではなく、あくまで解釈の一環として活用したいだけである。

こどもたちに／一日の乾いた学課で／／澄みわたった倦怠が宿り／／「矛盾」の二文字が理解できないほど／／頭が単純だったのだな。

まずは、①なのだが、上で‘澄みわたった倦怠が宿り’と仮に訳出した部分は、既存訳では“もの憂い倦怠がみなぎり”（伊吹 111）とされている。この詩を傀儡帝国への真っ向からの批判とする判断に立った、踏み込んだ意識（解釈）である。しかし、原詩文では、“<sup>마</sup>권태（倦怠）”に澄んだ空や水を想起させる“<sup>맑</sup>말간（澄みわたった）”という修辭がほどこされており、それと‘倦怠’との不調和、あるいは‘矛盾’が明らかで、それは意図的なものであろう。

そもそもこの詩の題名も当初は「矛盾」としていたのを、尹東柱が自ら二重線で消して「こんな日」と改めている（『写真版』31）。当初の題名が「矛盾」であることと、作品中でもことさら括弧つきで記されていることから、‘矛盾’は重要な詩語といえよう。運動場で遊ぶ無邪気

なこどもたちと、大陸の風にはためく誇らしげな傀儡の旗たちとの対比のなかで、澄んだ無垢な‘倦怠’こそは満州帝国のままならない日常の断片の‘矛盾’を描出していると捉える。

つぎに、②‘乾いた学課’については、“ひからびた学課”（伊吹 111）という訳語に、“日本語による学課”（伊吹 111）との注釈が付されている。‘民族的抵抗詩人’の詩句だから、帝国の国語教育を批判していると受け止めるのも理解できなくはないが、原文の“<sup>건조한 학과</sup>干斗（乾いた学課）”という詩語を、国語教育への批判と、一元的に解釈するのは少なからず強引な感が拭えない。

そこでそうした解釈に対する反証をいくつか提示してみる。まずは、その当時に詩人が編入学した光明学院中学部のカリキュラムである。

この学校の科目内容の特記すべき点は、一種の国際都市的な地域であった龍井の学校にふさわしく語学科目が多いという点である。尹東柱は4年生のときに4ヶ国語の言語を習わなければならなかった。①日本語、②朝漢（朝鮮語と漢文）、③満州語、④英語（学籍簿の収録順どおり）。

そのなかでもっとも比重が大きかったのはもちろん日本語。日本語は一科目を①読本、②文法、③作文の三分野に分けて、それぞれ点数をつけるほど重視した。そのつぎは英語。英語は、①読本、②会話、作文、文法の二分野に分けて教えた。朝鮮語は漢文とひとまとめに取り扱われ、満州国の領土であるためか、その科目名で、満語も教えた（宋 165）。

朝鮮語と満州語は、教科目の内容を細分化していないところからみて、重要視されていなかったらしい。そして、尹東柱が5年生のときにはカリキュラム変更があり、5年生は英語班と

満語班に分けられ、尹東柱は英語班に入ったため、満州語を勉強しなくなった（宋 165）。朝鮮語班が選択肢にないのは、ある意味で自明のことであろう。在満朝鮮人たちは“鮮日人”（koreo-japanese）として、日本人に同一であると作為的に同種族性を強調された。そのような植民地政策において、朝鮮の文化や言語が尊重されるはずもなく段階的に排除されていった。

しかし、問題は単純ではない。在満朝鮮人たちは抑圧された被植民者であると自認する一方、他の満州国民に比べ、自らはいちだん高みに立つ‘皇国臣民’であると植民者に同一化し、無意識に彼らの権力を羨望し模倣した（Jin 11）。あるいは、たとえそうした同一化に至らなくても、既存の5・6年制から4年制に修学年数が短縮されるなど、学力低下を招く新学制が施行される（Jin 13）なか<sup>(3)</sup>、辺境に暮らす在満朝鮮人の保護者たちには朝鮮内地や日本の上級学校へ進学できるよう、高い学力を子弟につけさせて社会的上昇の可能性を確保させたいという願いがあったのも事実である。在満朝鮮人を、五族協和の名のもとに満州国民に編入しようという関東軍の政策（満州国治外法権撤廃現地委員会、「在満朝鮮人教育行政処理要綱」、1935）に対して、朝鮮総督府は在満朝鮮人と在満日本人の教育に差をつけるのは、内鮮一体を標榜する立場から難しいと反対した（田中 134）。そして一旦は教育問題も朝鮮と満州間で協議することになったが、最終的には在満朝鮮人教育行政権を朝鮮総督府が満州国に移譲する運びとなった（田中 134）。当事者である在満朝鮮人たちの微妙な立場は「鮮系教育報告および要望事項」によく表れている。在満朝鮮人たちは在鮮同胞との差異を助長する耐えがたい政

策として抗議し、内鮮一体のイデオロギーを逆利用して‘日本帝国臣民’であることを盾に、差別を是正するよう嘆願した<sup>(4)</sup>。これらが富裕な、あるいは富裕とはいかないまでもある程度、資力があつた在満朝鮮人の実態であつた。

ついでには、以上と関連する校風についてである。当時、龍井の男子中学は恩真（西洋の宣教師経営のキリスト教系）、大成（民族主義系）、東興（社会主義系）、光明（親日系）の四校があつたが、5年制は光明だけで、あとはすべて4年制であつた。光明は、元々は1912年設立のキリスト教（韓国キリスト者たちによる長老教会経営、前身は1910年設立の広東義塾）による永新学校で、凶作の余波による経営難から、1924年に“大陸浪人”と呼ばれた日高丙子郎に買収された親日派の学校であつたが、売却にあたって永新学校の一教師の詐欺的手法が問題となり法廷闘争にまで至るなど、物議を醸した学校であつた。

ともかく新たに光明に赴任した東京帝大など出身の教師たちは、優秀な学生とみれば、日本の外務省の巡査か、満州の陸軍士官学校へ送ろうとした。ちなみに、のちに韓国で朴正熙の起こした5・16クーデターに加担した第三共和国の主役が満軍の将校たちで、このなかに光明学院の出身者が多い（宋 163 - 164）ことも興味深い。

そして、この日高丙子郎だが、彼の前では日本の総領事も軍人たちも震えあがるほどの実力者であつた。しかし、他方で朝鮮語も堪能で、ときに日本の政策を批判し、在満朝鮮人の福祉のために尽力するジェスチャーもみせる人物であつた。1920年、日本軍による間島大討伐のとき、焼かれた明東学校の再建費を日本国政府に出させたのも日高である（宋 159）。その際に交渉

(3) Yeong-bok Jin (13) より再引用。詳しくは、朴今海「満州事変後の日帝の在満朝鮮人教育政策研究」、『東方学志』130集、延世大学校国学研究院、2005を

参照されたい。

(4) Yeong-bok Jin (12 - 15)、田中隆一(131 - 134)参照。

にあたったのは明東学校の創始者であり校長、“東満州の大統領”の異名をもつ尹東柱の母方の伯父、金躍淵であったというように、尹一族とも因縁があったのである。

以上のように‘公用語’をめざす日本語によって、英語など複数言語を習熟するという、五族協和をうそぶく満州帝国ならではの、多民族多言語教育の実態があった。それはたとえば、京城に生まれはしたが、明日の生活の糧にも困窮し、長男であるにもかかわらず伯父のところへ養子に出されて、ようやく学校に通えた李箱の生い立ちからは、想像もつかない話だった。このことは、のちに‘生活’という詩句にこだわる尹東柱の自己批判的な文学的姿勢に連なる。

転校生の尹東柱は、朝鮮語で講義がなされていたそれまでの平壤の崇実中学とはちがい、クラスメートたちに比べ、日本語にずいぶん遅れをとっていた(宋 165)<sup>(5)</sup><sup>(6)</sup>。とはいえ、この時期の書籍購入歴および日本語や英語の原書の蔵書<sup>(7)</sup>、本のなかの流暢な日本語による書き込み(『写真版』198)をみると、読書家だった尹東柱らしく、短期間に精進して語学力を向上させたようである。

さて、これらのことを踏まえた上で「こんな日」に立ち返ってみよう。

砂埃の舞い上がる時代の風とはうらはらに、親に庇護され学校に通い、スノップで退屈な学

課に乾き、学費を無為にむさぼる“頭が単純”なこどもらへの嘆息は、すなわち詩人自身への詰りでもある。“日帝という敵を批判するよりもその敵に無感覚に対峙していた朝鮮人の学生たちを批判して嘆いて”いる(権 181)としても、その朝鮮人学生たちの枠から、詩人一人だけが免れているわけではあるまい。“단순하엿구나(単純だったのだな)”という詩句は詩人自身をも含めての自己批判であるものと考えられる。“兄”とはちがって、学友らとなんらかかわらず、無為に日々を過ごしている自らを恥じている。ちなみに、この“兄”は恩真中学の恩師である明義朝に何らかの使命を託され<sup>(8)</sup>中国入りし(宋 103)、日本警察に捕まっていた従兄弟の宋夢奎がモデルといわれるが(宋 167-168)、その“兄”との対比によって‘倦怠’の淵に佇む語り手である詩人の喪失意識と自己内部に向かう責め苦が際立つ。“兄”との再会を願いながら自らを恥じるこの責め苦こそが、実は尹東柱の社会的相関性の表出である。

この詩には、懐かしく回想された頑固だった“兄”とは対照的に、詩人の疲労とも諦念ともみまがう‘倦怠’の感覚、それがあからこそ等身大の満州帝国の日常が鮮明に描出されている。ここで尹東柱が成し得たのは、自分と一体化した友人たちへの観察と憐憫である。一見すると内向的な観察であるが、この飽くなき観察こそがそのままの日常をとらえているのであ

(5) “尹東柱は4年生、5年生の間ずっと、日本語の成績がもっとも悪かった。その間、尹東柱は反日系の学校ばかり通って、朝鮮語の授業を受けてきたのに比べ、ほかの生徒たちは入学時から敢えて日本語だけの授業を受けてきたわけだから、どうしても日本語の実力が不足していたことだろう”(宋 165)。

(6) 注(5)の下線部、“反日系の学校ばかり通って”いたという記述に関しては、年譜によれば、1931年に明東学校を卒業した後、尹東柱は1年間、大拉子の中国人小学校6年に編入している(宋 415)ことを補足しなければならない。懐かしい人々の名前を挙げていく尹東柱の「星を数える夜」(1941, 11, 5)に

は、この小学校で机をともにした異国の少女たちのモチーフも出てくる。多民族多言語文化の満州の日常が、この詩からも垣間みられる。一方で、この年の9月に満州事変が起きていることも、尹東柱の生い立ちと考え合わせて興味深い。

(7) 『写真版尹東柱自筆詩稿全集』巻末の所蔵図書目録、および宋友恵(258-259)参照。

(8) 宋夢奎は捕まり恩真中学を卒業もできず、のちに大成中学を出る(宋 103)。彼はこの事件以来、すでに要注意人物として日本警察にマークされていた(宋 121)。

り、‘倦怠’を自覚的に認識せしめているのである。ちょうど平壤より転学してきた1936年4月から年末までの9ヶ月の間に詩12篇、童詩16篇（この年の通算は詩19篇、童詩20篇）を詩作するなど、光明に在学していたこの2年間に尹東柱は多くの作品を創出した。また、延吉で発行されていた『カトリック少年』というこども向けの月刊誌に5篇の童詩が掲載された（宋168）。これらはいわば、‘矛盾’を自覚的にとらえんがために、‘倦怠’の淵に沈殿せざるを得なかった尹東柱の疼きであり、なんとかその無為な‘倦怠’から脱け出ようとしたもがきの証しである。詩に表現された‘倦怠’は、すなわち尹東柱の時代に対する存在の反証なのである。

### 2-3. 連鎖する日常の‘倦怠’

#### —「花園に花が咲く」と「終始」の‘倦怠’

では、さらに散文詩「花園に花が咲く」（作成日未詳、延禧専門学校時代、1938－1941年作と推定）における学友とのたわいもない日常と詩語‘倦怠’を辿ってみる。尹東柱は京城に移ってから、ひたすら日常を見つめ続ける。

さまざまな単語を寄せ集め拙い文章を綴るにもぼくの頭はさほど明晰ではありません…春風の苦悩にやつれ、緑陰の倦怠にうち沈み、秋空の感傷に泣き、路端の思索にまどろみ、この数行の文とぼくの花園とともにぼくの一年は成り立つのです。…時間を喰らうというのは…たしかに楽しいことにまちがいありません…しかしこれをぼくたちの妄言や時間の浪費だと即断なさってはなりません。

—「花園に花が咲く」より

気だるい無為な時間の流れとともに、尹東柱の“緑陰の倦怠”は、ほろ苦くも美しい青春の

彩である。引用は省くが、この“花園に集う友人たち”の描写はさらに続き、家に学費請求の手紙を書く夕べには考えあぐねた末によく、数行を書き送るというA君、喜ぶべき“書留（通称月給封筒）”を受けとる手が震えるB君、愛のためには食欲と睡眠を忘れてしまうC君、思想的矛盾に自殺を決めたD君が登場し、彼らの“けなげな心情”を自分のことのように理解し、互いに“やさしい気持ちで”対するのだと詩人は告白する。ありふれた青春の1ページでありながら、“世間は年々、砲声に騒がしいけれど、ことさら静かなうちにぼくたちの庭園では互いに融合でき、理解でき、これまでどおりに□□があるのは時勢の逆効果でしょうか”という問いかけがなされる。この問いかけと意味深長な2マスの空欄の詮索には興味を惹かれるが、ここではその点には立ち入らず、時代の激動からかけ離れたような学園の無為が強調されていることだけを確認するにとどめて、先を急ぐことにする。

以上のように、浮世ばなれした若者らしい苦悩と恵まれた学園生活がある一方で、後述するように生活の現実における労苦も記されている。

老人、若者、こどもといわず、誰も包みを持っていない者がいない。これが彼らの生活の包みであり、同時に倦怠の包みなのかもしれない。

—「終始」より

彼らの抱えた“倦怠の包み”（散文詩「終始」（作成日、「花園…」に同じ）はありふれた生を普通に生き抜くことの厄介さの包みとなっているが、つまりはこの世に生み墜とされた者たち、それぞれが全うしなければならない、日常を生きるという責任の包みでもある。

旅愁に佇み車窓から、詩人は“空と城壁の境

界線に沿って”視線をやる。城壁の切れるところに見たのは、“総督府、道庁、なんかの参与館、通信局、新聞社、消防署、どこかの株式会社、府庁、洋服店、古物商”であり、“アイスケーキの看板”である。“退屈な時間をやり過ごすために”語ったあるホラ吹き両班の逸話には、そびえる総督府とともに昌慶苑の動物、徳寿宮、和信百貨店のエレベーターなどが飛び出す。そして、これらの何気ない建造物は民族混濁への欲望のみならず、新旧混淆たる帝国の日常の圧縮図である。この「終始」で、ぼくらの汽車は“のろのろと進んで”いて“息切れすると停車場にもとまる”のだが、“どういう女たちなのか”毎日のように娘たちは“ぞろぞろと立って”おり、めいめいがやはり“例のあの包み”（“倦怠の包み”であり“生活の包み”）を抱えているのである<sup>(9)</sup>。

### 3. 日常的植民性の断片群の描出

#### — ‘生活’ をめぐって

前二章でふれた「終始」で詩句、“倦怠の包み”と“生活の包み”が示唆しているように、尹東柱の詩において‘倦怠’と‘生活’はパラレルに用いられ、表裏一体となっている。そこで‘倦怠’の意味を‘生活’という詩語の側からも探ってみる。

#### 3-1. “生活の包み”は“倦怠の包み”

##### — ‘生活’ とは何か

さて、‘倦怠’の諸相を分析する上で、重要と思われる詩語‘生活’が使われている「終始」をみよう。これは、人里離れうっそうとした松林のなかの下宿に住む“ぼく”の独白という形式をとった散文詩である。法令はないが女人禁制であるこの下宿には、“同じ屋根の下で全国八道のなまりがすべて聞けるほど集った、すら

(9) ここは尹東柱の観察に関して重要な場面である。詩人はこのあと“年頃の娘たち”の“体つきから”工場の女工たちではないと推察している。そして、聞き手へとも自らへともなく、軽はずみな“窓ガラス越し”の美人かどうかの“判断”を制止してみせる詩人の観察は、ツルゲーネフに因んで演技的な‘窃視’<sup>3</sup>といい代えることも可能ではなからうか。当然といえばそれまでだが、時勢となんら関わりなく少女たちの肢体は美しいのであり、それを透かし見る風景は素直な日常の描写であるがために、皮肉なまでにどこか切ない。容易に想像できる時勢の厳しさと、たわいもない日常性との矛盾が、かえって美しさを際立たせ、さらに痛々しさを喚起する。後述する「乞食」をみれば、尹東柱が醒めたパロディとしてツルゲーネフを踏襲したことを否定できないが、ツルゲーネフの代表作である“『獵人日記』”には、語り手の窃視場面が頻出する(計4編)<sup>4</sup>(乗松53)ことも着目に値する。ツルゲーネフは、そもそもフランスで流行しそのままロシアに輸入されるや、19世紀ロシア出版界において大流行した“生理学的スケッチ(физиологические очерки)”<sup>5</sup>を採用している。この流行は、科学ブームの実証の時代らしい同時代的風潮であったのだが、乗松亨平が包括的に述べているように、『獵人日記』が生理学的スケッチの影響を受けていることは、ベリンスキーなどによ

り再三、指摘されてきたことである。この場合は農奴などが観察対象だが、民衆を“凡庸な才能”で‘科学性をもって’観察し記述する、いかえれば易しく平坦な表現で努めて客観的に情景描写する手法である。結果的に尹東柱もこれを援用したことになる。次稿の課題として、余計者文学の系譜とともに詳述する予定であるが、悪事の現場を覗いてしまいそれに見入るという語り口などで、収賄、暴虐、農奴制の不正などを暴こうとするツルゲーネフにおいても、政治的目的を忌避する尹東柱においても、まなざしはあくまで‘科学性’に基づく対象への飽くなき観察である。つまり‘窃視’は、まるで異質なもののようと思われるがちであるが、いわばジャーナルを書くためのようなまなざしで集団を観察し、タイプ(類型)化して描出する生理学的スケッチの影響をも包摂しているのであり、習性化した尹東柱の観察記述を‘窃視’の要素も吸収したより広範なまなざしとして、その解釈に幅をもたせられないだろうか。直接には対峙しない安全な位置からの思うままの対象への観察は、内向きで淫靡なものだけではなく、ときに性的な要素を否定できないながらも、乖離的でありつつきわめて社会相関的なものであった可能性はなからうか。現時点でのこの問いについては、熟考し別稿に改めることにする。



りと端麗な成年男子ばかりがひしめいて”いた。ここでの“修道生活にぼくは貝の中のように安堵して”勉強に勤しみ暮らしていたのだが、“事件”は“雪の日”に起きた。といっても大仰なことではなく、“下宿仲間の友人の友人”が列車の出発までの1時間を“浪費するため”に訪ねてきて交わした対話と、その後の“ぼく”の生活上の変化のことである。

“そうさ、本でもまさぐっていたら勉強だと思ふのかい、電車のなかで眺められる光景、停車場で味わえる光景、また汽車のなかで接するすべてが、生活じゃないものがないのなら、生活のためにたたかうこの雰囲気に入り、見て、考えて、分析して、これこそが真正な意味の教育ではないのか、おい！君、本のページばかりめくって、人生がどうの、社会がどうのというのは16世紀にでもあり得ることさ、当然、門内に街なかに出よう心を変えたまえ”

人間を離れて道を修めるのはただの娯楽であり、娯楽であるゆえ生活にはなり得ず、生活がないゆえ、つまりは死んだ勉強ではないか。勉強も生活化しなければならぬと考え、数日内に街なかに入ろうと内心、決めてしまった。

そうこうするうちに南大門を通り過ぎた。誰かが“君、毎日のように南大門を二回は通り過ぎるだろうに、そんな風にも見たりするのか”という愚かしいメンタルテストを出すとしたら、ぼくは啞然とするしかない。そっと記憶を辿ってみたら、いつもではなくて、この道程を踏んで以来、その姿を一度も見つめたことがあったようじゃない。いわばそれがぼくの生活に不可欠なことではないから当然のことだろう。

これが彼らの生活の包みであり、同時に倦怠の包みなのかもしれない。

——すべて「終始」より

“この道程”とは、電車や汽車に乗り、街なかの人々を、そしてその‘生活’をじかに観察する道のりを指す。毎日のように同じ道を辿り、“ぼく”の“観察”の習癖は続くことになる。そして“生活の包み”をかかえた老人の“世間に揉まれた”顔、若者たちの“悲惨そのもの”の顔、せめて“かわいらしい”はずのこどもたちの、何とも“蒼白”な顔に見入る。それらの顔を見つめるうちに、ふと同様にみじめであろう自分の顔面を想起する。自分で自分を見られないことは幸いなことで、しげしげと自分自身を見ては“天逝したかもしれない”と語り、“自分の両目を疑わしいものとして、観察を断念しよう！”とうそぶく。ところがその直後にまた、今度は先に引用したように、日常の街なかの建造物を観察しはじめる。

果たしてこれらの飽くなき‘生活’観察は、何に起因し、いかなる意味を担っているのだろうか。尹東柱の当時の実生活における問題をも参考にして、詩語‘生活’について考えたい。

当時の詩人の生活に影を落としていたのは、進学に関する父子間の葛藤である。光明中学5年のときに本格的に波乱を呼びはじめた（宋173）ののだが、それこそが‘生活’上の厄介な問題のひとつだった。日ごとに厳しくなるばかりの植民地情勢にあって、文学好きだった自分の轍を踏ませたくない願う父は、尹東柱に“この時代におまえが文学をしてどうやって暮らしていけるのだ！…文学はだめだ、かならず医学部に行きなさい！医科に行けばこそ、暮らしていく心配がなくなるというものだ”（宋173）と頑なに主張する。夢と現実をめぐるそうした父子間の葛藤に、文科に行きたいのなら判事の

試験を受ければいと、法科をすすめる祖父の仲介まで入る（宋 172 - 176）。生活力あふれる祖父を頂点とし、一神教的男性中心主義の家風であった良家の子息である尹東柱は、家の重圧に苦しんでいたのである。

その後も、勉強も詩作も“生活化しなければならぬ”とストイックに語る尹東柱なのだが、そうした強迫観念的な自己叱咤こそは、実は尹東柱の性分が‘生活’と乖離しがちであることを示唆している。‘生活’観察は、うわすべりな自分自身の‘生活’への抗いであり、詩人の存在の反証であるといえよう。足元の‘生活’観察は、南大門を見上げることは“ぼくの生活に不可欠なことではないから当然”しないのだという自覚の芽生えに起因するのであろう。

とはいえ、‘生活’に不可欠なものではない南大門を見上げ‘なかった’とは言いきらず、見上げたことは‘あったようじゃない’という曖昧な言い回しにも注目しなくてはならない。詩人の煮え切らない微妙な心情と立ち位置の表れである。どんな人もみな抱えもっているという、生きがたさを表出する‘生活’をさらに探る。

一間の鶏舎の向こうには蒼空が宿り／／  
自由の郷土を忘れたにわとりたちが／／し  
おれた生活をとりとめなく愚痴り、／／生  
産の労苦を叫んだ。／／陰惨な鶏舎から溢  
れでた／／外来種のレグホン、／／学園か  
ら鳥の群れが圧され出る／／三月の澄んだ  
午後もある。／／にわとりたちは溶けゆく  
堆肥を掘るのに／／ちぢまりした両足が  
奔走し／／飢えていた嘴はまめまめしい、  
／／両目はかたく、／／飛べる技能を忘却  
したのだな、／／惜しい、洗練されたその  
体が

——「にわとり」より

学園の一角にある“鶏舎”は一間に線引きさ

れて狭く、にわとりたちは自由を奪われているからこそ、“蒼空”に見入る。上で“とりとめなく愚痴り”と仮に訳した詩句は、原文では“<sup>자잘대고</sup>”とあり、一貫性なくブツブツと不明瞭なことを話すことである。“自由の郷土”を持っていないにわとりたちは嘆き節（打令）をうたうが、“生産の労苦”にあえぐ“しおれた生活”から脱け出られないことは自明のため、ついにはいつの日か“圧され出る”ことを夢想するまでに至る。“両足の奔走”も暮らしていくことの難しさを語っている。

この原稿では、最終行の下線部は尹東柱自身が鉛筆で傍線を引いており、波線部については、あたかも詩人の悲嘆を隠すかのように上から線を引いて消してしまっている（『写真版』40）。‘生活’に奔走したにわとりたちの、“飛べる技能を忘却”したことへの観察とそれに対する憐れみは、詩人自身の境遇と重ね合わせられている。‘生活’に奔走するあまり、かけがえのない飛翔術まで忘却してしまったレグホンは、ともすれば圧力にめげて夢を諦めざるを得ない状況へと追いやられつつある自分自身の投影であり、自己陶酔の色合いが濃い。

何日も飢えながら“ぼくは死んでも医科へは行けない。文科へ行かなければならない”と固執するや、父親は激噴した。茶碗が表にビュンビュン飛び、大騒ぎになったとのことだ（宋 174）。

進路に関して、父も尹東柱も譲らなかったようだが、“惜しい、洗練されたその体が”という詩句には、レグホンの身の上に対する詩人の同一化が顕著に表れており、その自己憐憫が恥ずかしくなって、詩人自ら詩句を上から消してしまったのであろう。他方で、父親の激噴も“この時代”であるからこそその親心であっただろう。尹東柱にしてみれば、ままたらない‘生活’す

なわち‘倦怠’を描出することによって、植民地化の実相に肉迫し、さらにはそれを凌駕する可能性を見いだすといったように、文学によって実生活に寄与したいという願いがあったのではなかろうか。

ついでに、「市」をみる。この原稿には、作品全体に大きな×印がつけられていて（『写真版』69）、詩人としては会心の作ではなかったようであるが、描出された‘生活’に関する記述は捨てがたく、必要最小限を抜粋する。

早朝、妻たちはしおれた生活を／籠ひとつに  
いっぱい詰めて頭に載せ…／背負って  
…抱きかかえて…／集まってくる ぞくぞく  
市に集まってくる／／貧しい生活をおの  
おの拡げておいて／押し合い…へし合い…  
／めいめい生活を叫ぶ…たたかう。／／ひ  
がな一日、ばたばたした生活を枘ではかり、  
秤ではかり、物差しではかりつつ／日が暮  
れて妻たちは／辛い生活と引きかえ、また  
頭に載せて帰っていく。

——「市」より

「にわとり」と共通するのは、“しおれた生活”の苦さ、“貧しさ”へのおそれと悲哀である。

トンネルを脱けたとき、近ごろ複線工事に奔走している労働者たちが見られる。朝の始発で出掛けたときも働いていて、夕方おそい列車で帰ってくる時も彼らはずっと働いているのだが、いつ始めていつ終わるのかぼくとしては推し量れない。この人々こそが建設の使徒だ。汗と血を惜しまない。

——「終始」より

“奔走している労働者”は、“こちんまりした両足が奔走”する“外来種のレグホン”と重な

る。詩人は、乾いた観察結果を語るのだが、ここでも語られる対象へのヒューマニスティックな憐憫は、いつの間にか自己憐憫と見まがうまてになる。さらに、散文詩「星屑の落ちたところ」（作年未詳、「花園…」に同じ）では、詩人の生活にまつわる内面吐露がつづく。

…だからといって彼とぼくが性格や環境や生活が共通するところがあるからではない。……どこへ行っても生の根を張れなくて、どこへ行っても生活の不便があるわけではなかろう……木は…限らない滋養分を吸収して光り輝く陽ざしを取り込み、たやすく生活を営為し…

——「星屑の落ちたところ」より

この“彼”とは“木”のことであるが、自分の進むべき道について思いあぐね苦悩する詩人は、大地にとらわれている木を、はじめは“たいそう不幸な存在で愚か”だと憐れんでいた。しかし、木は自らが生み墜とされた場所で“たやすく生活を営為し、ひとえに空だけを仰いで伸びることのできる幸福”な存在であると賛嘆するに至る。

このような“木”を人にたとえる考察は、天命を信じるキリスト者の語り口のなかにしばしば見受けられ、いわば典型的なのだが、尹東柱はさらに進んで“人間には行動できるという人としての誇り”があり、それを満たせないのは“骨身に沁みる思い”であるという。そして、夜空の星屑の墜ちたところが、ゆくべき方向ならば、“墜ちるべきところに”墜ちてくれと、星屑という運命に祈りを託す。‘生活’にこだわる詩人は、定位できる場所をもたない根なし草（uprooted）であることを自覚し、それを引き受ける。それは人間一般の条件であるのはもちろんのことだが、とりわけ、植民地下にあった満州を包含する帝国全体の状況を厳しく自覚

した上での、詩人の抒情の疼きであろう。詩語‘倦怠’と‘生活’はここに至って、ある程度その射程の輪郭を明らかにしたと言えるであろう。

### 3-3. ‘生活’を観察する余計者の‘倦怠’

#### —「乞食」と「ツルゲーネフの丘」

最後に、‘倦怠’と‘生活’という詩語が表に表れはしないが、それらに込められた尹東柱にとっての意味内容が、集約されていると思われる散文詩「ツルゲーネフの丘」(1939. 9 / 原稿には“十四年九月”と表記、『写真版』105) をとり上げる。長くなるが、全文を以下に記す。

ぼくは峠の道を越えていた……そのとき三人の少年の乞食がぼくをやり過ぎた。一番目のこどもは背中に籠を背負い、籠のなかにはサイダー瓶、缶詰の缶、鉄くず、ぼろ靴下のかたわれなど廃品がいっぱいだった。

二番目のこどももそうした。

三番目のこどももそうした。

ぼさぼさの髪、まっくろの顔に涙を溜めた充血した目、色を失い青ざめた唇、よれよれのボロ、垢ぎれた裸足、

あー、どれだけおそろしい貧しさがこの幼い少年を呑みこんだのか！

ぼくは痛ましい思いにかられた。

ぼくはポケットをまさぐった。ぶあつい財布、時計、ハンカチ……あるべき物はすべてであった。

しかし、むやみにこれらやる勇氣はなかった。手でさわったり、いじったりするばかりだった。

親しく声でもかけようと「君たち」と呼んでみた。

一番目のこどもが充血した目でじろっと

振り返るだけだった。

二番目のこどももそうするだけだった。

三番目のこどももそうするだけだった。

そうしておまえは関係ないとばかりに自分たち同士でひそひそと話しながら峠を越えていった。

丘の上には誰もいなかった。

深まる黄昏がおし迫るばかり——

——「ツルゲーネフの丘」

これは、ツルゲーネフの『散文詩』中の「乞食(Нищий)」(1878. 2) に着想を得たもので、そのパロディとなっており、さらに李箱の「鳥瞰図・詩第一号」との間テキスト性も認められる。この詩が朝鮮にはじめて紹介されたのは1919年2月で、詩人の金憶の翻訳による(宋205) とのことだが、さらに先立っては、岸曙生(金憶の筆名) の名で、『泰西文藝新報』第5号(1918. 11. 2) 掲載の「物乞い(비렁망이)」がある。

その蔵書からヴァレリーやジッド、プルーストなどを尹東柱が日本語版で読んでいたことは確認できるが、「乞食」については、朝鮮語版で読んだであろうと推測されてきたものの証拠はなく、どの朝鮮語版で読んだのか、さらには日本語版で読んだ可能性も否定できない。朝鮮語と日本語のどちらも原文に忠実に訳されており、それを用いてもほとんど問題はないのだが、版を特定できない以上、ここでは双方に加え、ロシア語の原詩も踏まえておく。

さて、ツルゲーネフにおける乞食は“よぼよぼの老人(дряхлый старик)”であるが、尹東柱では、“三人の少年の乞食(세 소년 거지)”に変えられている。おそらく李箱による京城の街の路地をおびえながら疾走する十三人の児孩(こども) をとり込んだのだろうが、「乞食」と「ツルゲーネフの丘」の対比は明らかである。「乞食」では、街かどでほどこしを求められた

語り手は、ポケットをまさぐるが、財布も時計もハンカチ一枚も持ち合わせていない。詫びる“わたし”に、当の乞食は、その詫びの言葉もまた、ありがたい“ほどこし(подавание)”であると礼を述べる。こうして“わたし”と“乞食”の立場は転倒し、あげくは自分の方がこの“兄弟”からほどこされたのだと悟る。それ以外では“痛んだ涙目(Воспаленные, слезливые глаза)”は“涙を溜めた充血した目(눈물 고인 충혈된 눈)”、“青ざめた唇”はまったく同一(посинелые губы / 푸르스름한 입술)に踏襲されており、“粗ぬののボロ(шершавые лохмотья)”は“よれよれのボロ(너들너들한 담루)”で、“不潔な傷口(нечистые раны)”は“垢ぎれた裸足(엿겨진 맨발)”と乞食の風体はおおむね同じであるのに対し、ポケットのなかは対照的で、乞食の態度もまるで反対である。ツルゲーネフの“わたし”のポケットはからっぽなのに、尹東柱の“ぼく”のポケットは“あるべき物はすべて”入っていて膨れている。どうしようもない“生活の包み”がまさしく“倦怠の包み”であり、豊かな“ポケット(호주머니)”とはうらはらに誰もいない丘の上に宿る黄昏が、‘倦怠’の端緒を描出している。

「乞食」は皮肉に満ちているとはいえ、貧しい人々に潜む、まことに美しい心性が浪漫主義的に讃えられていて、それが魅力なのだが、若干の甘ったるさを否めない。それに比べ、尹東柱による京城の少年の乞食たちは、人の心の機微などすっかり失い乾ききってしまっている。ありふれた日常は残酷で、“ぼく”の豊かなポケットはみじめなほど孤独である。乞食の少年たちの“おそろしい貧しさ”という‘生活’を目の当たりに突きつけられた“ぼく”は‘倦怠’の淵に沈む。一見、社会には何の貢献もし得ず、そればかりか乞食からも疎外される存在である。‘余計者(Лишний человек)’の不甲斐ない“勇氣”のなさは深刻な男らしさ(masculinity)

の欠如である。しかしながら、そのありのままの観察と語りこそは、前節でみた“木”のようにには生きられない、行動する誇りある人間であると同時に定位する場所ももたない、いわば根なし草たちの、社会への真摯な対峙としての可能性を秘めている。

ところで、さきに述べた複数のテキストの混濁という詩作法は、尹東柱がよく用いる方法で「ツルゲーネフの丘」に付随するものとしては、「八福—マタイの福音書五章三—十二」(1940)が挙げられる。これは表題にもあるように「マタイによる福音書」第五章三—十二節の、イエスによる垂訓「八福の教え」に着想を得て、形式は同上の李箱作品を援用している。

周知のとおり、福音書では“こころの貧しい人たち”、“悲しんでいる人たち”、“柔和な人たち”、“義に飢えかわいている人たち”、“あわれみ深い人たち”、“心の清い人たち”、“平和をつくり出す人たち”、“義のために迫害されてきた人たち”という「八福」なのだが、尹東柱は「八福の教え」のうち、第二の福のみを特化している。聖書での“悲しんでいる人たちは、さいわいである／彼らは慰められるであろう”という第二の句を、八回くり返すことが尹東柱なりの「八福」ということであろう。八回、唱えられた祝福は、最後で一行の空白のあとに、“ぼくが永遠に悲しむであろう”と結ばれている。

抵抗の民衆神学であるキリスト教に不動に根ざす民族主義者ならば、八福のうち、他の福を特化し劇的に詩作に持ち込むことも可能であったろう。しかし、尹東柱は“悲しんでいる人たち”にことさら同一化を図り、キリスト教の秩序は順守しながら、選ばれた悲しむ者として自己を印しづけ、その責任と苦悩の中に慰めと救いを模索している。1940年から1年ほど絶筆する(12月になって3篇を詩作)くらいに信仰上の懐疑に苛まれる経験をしながらも(宋212—215)、尹東柱は聖書を踏襲しイエスの山

上垂訓の外貌に隠れた、敬虔なキリスト者の素振り棄てない。つまり、懐疑的な反キリスト教的表現は避けずにはいられない習性をのぞかせている。日ごとに峻烈をきわめる現実に対して、信仰生活が何をなし得るのか、“神の約束を信じられない”(宋 220)、“途方もない絶望であり、不信仰の表白”(宋 220)として、「八福」を解釈することもできるだろう。しかし聖書を用い、教義を裏切らないように繊細な配慮をほどこしたその素振りこそは、確固として反キリスト教的にはなり得ない、いいかえればキリスト教の理念とは、詩人にとって否定しきれないものであったことを示している。すなわち、尹東柱が称揚されてきたようなりっぱなキリスト者というよりは、等身大の苦悩するキリスト者であったことを痛切に示している。信仰の危機からようやく脱け出た尹東柱が書いた詩は「八福」、「慰労」、「病院」だが、それらの分析は別稿に改める。

以上のように、これまでテキストに密着するように努めながら、‘矛盾’－‘倦怠’－‘日常’－‘生活’という詩人の意識の流れを辿ってきた。「永遠に悲しむ」祝福は、いよいよ存在の反証としての‘倦怠’を浮き彫りにする。あるいは、その逆でもある。自分のなかに食い込んだ外在性、たとえば植民地主義の影響力を自覚するがために、純な何ものかへの内在的な希求が切実になる。そうした詩と社会との絡み合った関係性こそ、尹東柱のポエジーの磁場となっている。

#### 4. おわりに

さて、これまで東アジア全体において、国境と民族を乗り越え相互補完的に偶像化される‘民族的抵抗詩人’尹東柱の、その修辞には似つかわしくない‘倦怠’という詩語に着目し、テキストの内在的評価を試みてきた。植民地期

の犠牲者というテキスト外的な情報に、過度に依拠しがちになる一般的評価への疑問から、それらの解釈に連なる受容傾向、および 20 世紀初頭の同時代的心象など、社会的相関性にも留意した上での文学的再評価を試みた。

その結果、李箱や熊谷孝など同時代の青年たちがそうであったように、尹東柱も満州という傀儡帝国の日常のなかで、のちには新旧混淆とした京城の日常のなかで、‘倦怠’という想念に沈潜していたことが明らかになった。

さらに、この‘倦怠’の意味を追求するために、内なる‘倦怠’を引き受けようと思つめ続ける尹東柱の自己観察が、日常にありふれている‘生活’への飽くなき観察と重なりあっていることにも注意を払い、それらを日常的植民性の諸相として評価する可能性も模索した。すると、詩語‘倦怠’が、その言葉の想起させる後退的な含意とは正反対に、すぐれて時代的、社会相関的な意味を担っていたこともおおむね理解できた。

ところで、さきに‘帝国の日常’と述べたが、満州、京城に続き、帝都東京、古都京都の日常のなかでの尹東柱の‘倦怠’は、いよいよ異郷での‘生活’への密着が深化し、それにつれて詩的抒情が深まる作品となっている。これらの詩作への転換点として重要な作品群が、先に述べた「八福」、「慰労」、「病院」だと考えるのだが、紙幅の都合上、これらについては次稿にて論じたい。

また、尹東柱の‘倦怠’と表裏一体の‘生活’に随伴する自己観察についても、今後、‘窃視’(Voyeurism)の角度から読み直していきたい。ことに「病院」には‘窃視’の端緒が表出していて興味深い。尹東柱の偶像化された政治的イメージからか、これらの観察についても、抵抗詩人の崇敬すべき自己凝視などと称揚される傾向にあるが、抑圧的な社会情勢下にあったこれらの‘窃視’は、社会相関的な男性性の欠如の

表れており、東アジア固有のもので、西欧的な‘窃視’のもつ淫靡な含意とはズレがある。ヘブライ文学作品 (Pinsker 177) などの表象するユダヤ的コンテキストや、帝政ロシア社会の矛盾を叙述したツルゲーネフの‘窃視’ (乗松 53) の援用の可能性も探してみたい。その試みも、尹東柱の脱神話化を企図したものである。現段階での考えの概略は注 (9) に記した。

最後に、過剰コンテキスト化によって読解される傾向にある尹東柱が、‘国語’教育の現場などで世襲的犠牲者意識 (hereditary victimhood) を増幅させるテキストとして消費されてしまう危険性に、今後も注意を払う必要がある。さらには、これらの読解が、玄界灘を越えて日本にそのまま受容されることで、かつての宗主国の当事者としての責任を曖昧にし、相互補完的に偏狭な民族主義に散りかねない危うさを孕んでいることにも、引き続き注視しなければならないだろう。

政治的言説にとらわれない尹東柱の文学的再評価は、文学的領域のみに留まらず、歴史見直しの文脈からも意義深いものとなるであろう。

#### 【付記】

底本は以下のとおりである。

『<sup>そら</sup>天と風と星と詩』第一版、正音社、1948。

『<sup>そら</sup>天と風と星と詩』第二版、正音社、1955。

『写真版尹東柱自筆詩稿全集』民音社、1999。

『原本対照尹東柱詩集』延世大出版部、2004。

※本文中の「こんな日」、「花園…」、「終始」に限り、『社会文学』35号 (日本社会文学会) 掲載予定の分析に一部、重複する部分がある。

#### 主な引用・参考文献

熊谷孝『井伏鱒二— 講演と対談』、鳩の森書房、1978。

崔東鎬「尹東柱の「もうひとつの故郷」と李箱の「門閥」の相互テキスト性研究— 詩語〈白骨〉を中心に」、『語文研究』、2002、pp. 309 – 325。

権五満『尹東柱詩の深層読解』、ソミョン出版、2009、pp. 60 – 239。

伊吹郷『空と風と星と詩』、影書房、1984。

宋友恵『尹東柱評伝』、世界社、1988。

田中隆一「満州国期の在満朝鮮人問題」、『満洲国と日本の帝国支配』、有志舎、2007、pp. 129 – 202。

Yeong-bok Jin「満州に対する帝国主義的欲望と植民地的主体」、『満州における日常的植民性』、漢陽大学校 WCU トランスナショナル日常史事業団・比較歴史文化研究所、2011、pp. 9 – 22。

林志弦「世襲的犠牲者意識」、「ジクムント・パウマンとの対談— 悪の陳腐さから悪の合理性へ」、『敵対的共犯者たち』、ソナム、2005、pp. 51 – 102。

乗松亨平「ツルゲーネフ『獵人日記』と生理学的スケッチ— まなざしと距離の演技」、『ロシア語ロシア文化研究』34号、日本ロシア文学会、2002、pp. 51 – 57。

Shachar M. Pinsker, *Literary Passports: The Making of Modernist Hebrew Fiction in Europe*, Stanford Studies in Jewish History and Culture, Stanford University Press, 2010, pp. 165 – 184。